

## 巻頭言 「羊の喜び」

宇野 元

『翼をもつ言葉』の「訳者あとがき」に、ビクターの犬のことを書きました。カール・バルトのつつましい書斎には、小さな机が壁に向かって置かれていて、壁には16世紀前半の画家、マティアス・グリューネヴァルトのキリスト磔刑図が掛けられています。彼はそれを常に目にしながら仕事をしました。それにあやかって、あの犬を自分の仕事部屋に置きたい、と。以前、銀座の山野楽器にたくさん並んでいた横を通り過ぎてしまった、残念な思い出をふりかえって。すると、思いもかけないことでした。訳書が出て間もないころ、Sご夫妻が親しく訪ねてくださり、あの繊細な首の角度と表情をみごとに再現しているミニチュアをプレゼントしてくださいました。びっくりし、感謝にあふれました。そしていつもよろこびをもって眺めています。

もとは絵で、「ヒズ・マスターズ・ヴォイス」という題がついています。「主人の声」。蓄音機から主人の声が響きだすと、サッとその所にゆき、思慮深げに耳を傾けている姿を描いたものです。自分もそんなふうにならせていただく。聖書の言葉が語られる。すると、それまで何をしていたか、さあ、それはわかりませんが、身もかろやかに動く。そんなふう。ちょうど、ヨハネ福音書第10章における主イエスのたとえの、羊たちのように。



私たちの主人である方は、私たちの弱さや抵抗をものともされません。また、ご自身の言葉を聞くことの、私たちの無能力を問題にされません。主人みずからが、御言葉を聞き分ける耳をひらいてくださいます。

私たち羊のあやうさ、不安定さのただなかに、この恵みが存在することを感謝いたします。私たちの歩みはこの恵みに支えられています。私たちのもっとも深い喜びは、この恵みの確かさに信頼できることです。